

Commentarii Etymologici (I)

——擬音語と鳥の名称——

永 野 芳 郎

I

言語記号（すなわち語）の音声的側面が概念の側面となんらかの形で暗合するか関連する——このようなことが少なくとも客観的に明らかな現象はやや専門的に「音象徴」（sound symbolism）という名のもとに扱われている。たとえば英 cuckoo に平行するものとして、独 kuckuck, 仏 coucou, ルーマニア cucu, アイルランド cuach, ウェールズ cog, ロシア kukuška, フィン käki, ハンガリア kakuk, あるいはギリシア kókkux, ラテン cuculus などは一般に擬音語（echo word または onomatopoeia）としてよくあげられる一連の語詞である。いうまでもなく、ここに見られる形態音韻的類似性はそれぞれの言語集団に独自の記号選択の結果である。この種のものが、いかなる人間言語に普遍的なものであるにせよ、きわめて徴々たる数をもってみずからの存在を主張するにすぎないことは事実である。にもかかわらず、それは記号としての特異性ゆえに、古来人々の注意をひき、ともすれば誇大視されがちであったこともまた事実である。語とそれによって「指示されるもの」（referent）との関係が「自然のままに」（*φύσει*）、すなわち必然的な因果によって出来たものであるか、それとも単に「慣習のままに」（*θέσει*）、つまり恣意的に生じたものか——要するに言語の起源にかかわる、こうした議論を古代ギリシアの哲学者たちの

間に誘発させた大きな原因もまた実はそれにほかならなかった。しかも、それ以降に出現した種々の言語起源説で擬音語の存在を前提としていないものはどれ一つとしてない。しかるに、言語起源全体の問題が臆測の域を出ぬ、もはや無用の論としてほぼタブー化され、他方では言語の本質に関する現代の認識が擬音語なるものを他となんら異なるところのない、恣意的な記号にすぎぬときめつけてしまっている以上、特に現時の共時的な言語研究では、その存在は概してかえり見られていないといっても過言ではない。

さて、今世紀はじめ言語研究のあり方に大きな指針をあたえたとされるソシュール(F. de Saussure)の『一般言語学講義』(初版1916年)では当の擬音語について次のような言葉が見うけられる。「能記〔すなわち語の音声面——筆者註〕の選択がかならずしも恣意的でないというために、人は擬音語をよりどこにすることができよう。しかしこれは決して言語体系の組織的な要素ではない。さらにその数は考えられている以上にずっと小さいのである。……純然たる擬音語(たとえば *glou-glou*, *tic-tac* などの種類)についていうならば、これらは少数であるのみならず、その選択はすでにある程度恣意的である。というのはそれらはある物音の近似的な模倣であり、すでに半ば慣習的なものにしかすぎぬからである。……さらにそれらが一旦言語の中に導入されると、いずれは他の語もこうむる音韻、形態その他の変化の中に引き込まれてしまう。」(“On pourrait s'appuyer sur les *onomatopées* pour dire que le choix du signifiant n'est pas toujours arbitraire. Mais elles ne sont jamais des éléments organiques d'un système linguistique. Leur nombre est d'ailleurs bien moins grand qu'on ne le croit.... Quant aux *onomatopées* authentiques (celles du type *glou-glou*, *tic-tac*, etc.), non seulement elles sont peu nombreuses, mais leur choix est déjà en quelque mesure arbitraire, puisqu'elles ne sont que l'imitation approximative et déjà à demi conventionnelle de certains bruits.... En outre, une fois introduites dans la langue, elles sont plus ou

moins entraînées dans l'évolution phonétique, morphologique, etc. que subissent les autres mots.”) [*Cours de linguistique générale* 第4版 (Paris 1949), pp. 101—102]

今ここに引いたソシュールの言葉が額面どおりに解されて、擬音語の考察がますます等閑に附されたとしたならば、まことに遺憾である。私の見るところでは、特に末尾の一文は新たな研究課題を提起する点できわめて示唆的である。すなわち擬音語が音韻変化をうけて、その発生の動機たる擬音性を失うに至る経緯、そしてこれと同時に意味の改変も時として要求されるような過程がそれである。のみならず(残念ながらソシュール自身が遂に論及することのなかった)その逆の過程もまた考察の価値があると思われる。すなわち、言語体系内にはかならずしも顕在的ではないけれども、常に言語意識の下にかくれて、その発現の機を待っている表現性(expressivité)の力がある。この力によって擬音的な動機づけのなかったか、もしくは稀薄な記号がその概念に対応できるように、擬音的性質を帯び、あるいは補強をほどこされるといった過程のことである。

こうした課題が正当に扱われるのは、いうまでもなく、歴史的観点に立脚した形態音韻論ならびに意味論の分野においてである。19世紀のはじめからほぼ一世紀の歳月をついやして確立され、なおも細部の彫琢にたゆみなき印欧語比較文法の成果と方法にもとづいてこそ、歪曲されない論議の展開と新しい事実の発見が期待できるであろう。こうした視野のもとに、次の小論でもっぱら考究の対象としたのは音象徴が命名の上で最も強い動機としてみとめられる鳥の名称である。

II

古来、人間生活の中でなんらかの具合に登場してきた動物の中でも、鳥類はその鳴き声にもとづいて命名されることが最も多かったようである。様々の種

類に特徴的な鳴き声は何よりもまず人間の意識にのぼるからである。鳥の鳴き声が発話の状態における人間言語と類似する大きな点はその分節的な (articulate) 性質にあるだろう。このことは、どれほど大ざっぱであっても、言語音による鳴き声の模写をかなり都合よくさせていると考えられる。この場合、いうまでもなく現実の音響を忠実に模写する必要はない、また人間の言語音の本質からしてそれはほとんど不可能でもある。ただ実際の音の特徴的な諸点に対して、聴覚印象上似ていると感じられる、あるいはそのような暗示をあたえる音声を連ねて記号化するだけで十分なのである。上掲の「カッコウ」を意味するほとんどすべての語には二箇連続した無声 (稀に有声) 軟口蓋閉鎖音が用いられているが、この音素をその鳥の実際の鳴き声に我々が聴きとっているかどうかは全く疑問である。諸言語間のいちじるしい音韻の類似性が物語るように、この鳥の場合は鳴き声が名称になりやすい、むしろ特別の事例であって、実はそうでないものの方が多いと見なくてはならない。

a) もっともありふれた鳥の一種、「カラス」(烏)を意味する英語の語詞は通常 crow のほか rook および raven がある。第一のものは総称的に、第二のものは「ミヤマガラス」(“black hoarse-voiced bird of crow tribe nesting in colonies” — COD), そして最後のものは「オオガラス, ワタリガラス」(“large glossy blue-black-plumaged hoarse-voiced bird of crow kind feeding chiefly on flesh, often kept tame, and popularly held of evil omen” — *ibid.*) の意で用いられる。この三語のうち擬音的性質をもっともよく保持しているのは crow であるが、他の二つとは一応起源を異にする語である (後述)。

まず rook についてその源をたどってみると、古期英語の形は hrōc [χrɔ:k] である。これはそのまま古期高地ドイツ語 hruo(c)h (> 現代高地方言 ruch「シロハンガラス」), 古期北欧語 hrókr などに対応する (なお、これらと同系の語に古英 hrāca, hræcea「咳ばらい」, 古北欧 harka「呼ぶ」などがある)。この諸形から推定される共通ゲルマン語形は *χrōkaz である。ここで明らかなの

は、なかなづく語頭の無声軟口蓋摩擦音 /χ/ と震動性の強い /r/ (より正確には /R/) との結合がその鳥の鳴き声を巧みに暗示しているということである。これは誰しも感じることにちがいない。なお、フランス語 freux 「ミヤマガラス」は上掲の共通ゲルマン語形にもとづく古代フランク族の方言 *hrōk を経てもたらされたもので、語頭の音素 /f/ がゲルマン語のそれ、/χ/ の模写であり、その後も維持されてきたのは興味ぶかい。しかし近代のゲルマン諸語では /χ/ は弱まって、遂に消失した。

ところで、この共通ゲルマン語形 *χrōkaz の語幹部 (-a- は語幹母音, -z は変化語尾) *χrōk- の末尾音 (Auslaut) /-k-/ の正体は何であろうか。これは疑いもなく語頭音素 /χ/ とは同器官的な重複 (reduplication) または拡張 (Erweiterung) の要素であって、印欧語のきわめて古い段階では強調の手段として、種々の重要な役割を果たした。こうして我々はさらにこの形から音韻対応の法則に注意を払いつつ、一段と古い印欧語の形 *krōg- を再構することができる。これを現実反映しているのが、たとえば、ギリシア krōzō 「カラスのように鳴く」である。またリトアニア語からは「カラス」にあらずして、「ツバメ」を意味する kregždė,あるいは krogìù 「喉を鳴らす」などを挙げることができよう。かくてルートの *krōg- は *krō- にもとづいていることがわかるが、この場合長母音 -ō- はその性質からすれば少なくとも表現的な性格を有する、二次的な語根形成要素 (formans) である。とすれば、それを除いた部分の *kr- は印欧語本来の語根タイプ CVC (子音+母音+子音) の観点からすると、^{アブラウト}母音交替 (Ablaut) のゼロ階梯 (zero-grade, Nullstufe) として現われていることがわかる。なお正常階梯 (normal grade, Normalstufe) の形は *ker- である。

次に「オオガラス, ワタリガラス」を意味する **raven** の古期英語の形は hræfn であって、対応形は古高独 (h)raban (>現独 rabe), 古北欧 hrafn (スウェーデンの ^{イエスベリイ}Järsberg 石碑文では HarabanaR) などである。これから再構さ

れる共通ゲルマン語形は **krabnaz* である (ただし /b/ は摩擦性の /b/ で /v/ に酷似。対応上は本来 /f/ となるべきところ鼻音の前で有声化した)。これは共通印欧語の段階で唇音の拡張要素 -p- が母音 -o- を介して語根 **kr-* に添加された形 (**krop-*) をその前半に反映している (ラテン語の *crepō* 「音がする, ひびく」はこの段階をあらわす)。そしてこの場合接続されたのは -no- 語幹であった。このようにして **krop-no-* > 共通ゲルマン **krabnaz*。なお語頭に強調の (intensive) 歯擦音 /s/ が添加された状態であらわれるのが古英 *scræb*, 古北欧 *skarfr* 「ウミウ」(海鵜) である。

印欧語アプラウトの正常 (e) 階梯または ^{*}o 階梯にそれぞれもとづく語根 **ker-* または **kor-* が諸言語にもたらした鳥の名称は上掲のもの以外にも少なくない。たとえば前者からはギリシア *kérkhnē* 「タカ (の一種)」, 古プロシア *kerko* 「アビ」(水鳥の一種) など, また後者からはサンスクリット *karaṭa* 「カラス」, ギリシア *kórax* (同), *korónē* 「ウミウ」, ラテン *corvus* 「カラス」などのように。

b) 「アオサギ」(青鷺) を意味する現代英語 **heron** は, もしその鳴き声から命名されたとしたら, 擬音的性質を暗示させるものをもはや有していない。というのも, これは後述するように, れっきとしたゲルマン語起源の擬音語ながら, ロマン語的な改変をこうむって, 中世にフランス語から借用されたからである。中期英語の形は *he(i)roun*, *herne* などで, (12世紀) 古期フランス語の *hairon* (> 現仏 *héron*) がその源である。他のロマン諸語について見ると, プロヴァンス方言 *aigron*, スペイン *airón*, イタリア *aghirone* などで, これらは俗ラテン語形 **hāgirōn-em* を通ってラテン *hāgirus* にさかのぼる。しかしこれは実は古高独 *heigaro* (> 中高独 *heiger*) からの借用である (ちなみにフィン語にも *haikara* の形で借入されている)。さて, 他方では古期英語にはやはり「アオサギ」を意味する *hrāgra* という語があった。その形態からすれば, これは上掲の古高独 *heigaro* と比較して, より古い段階を示していること

がわかる。事実、これにもとづいて再構される共通ゲルマン語形は **χraigron-* である（古英の長母音 *ā* は共通ゲルマン語の二重母音 *ai* からの発達）。とすれば、古高独 *heigaro* が実は祖形 **χraigron-* において二箇連続した */r/* 音素のうち一方が消失するという、いわゆる重音脱落 (haplology) の結果——すなわち **aigron-* ——であることが判明するのである。さらにゲルマン語形から共通印欧語形を再構するならば **χkreik-ro-* となる（語根延長母音 */i/* と重複音素 */k/* とが加わった上に *-ro-* 語幹がついて拡張されたもの）。ここにおいて我々は既に述べた *rook*, *raven* でかつて用いられた語根と同一の **kr-* が構成要素として存在することがわかる。いうまでもなく擬音の要素である。

さて上掲の古高独の形が本来の姿から転訛した異形 (variant) であったのに反し、正統的な形は語頭の */χ/* をもはや有しなかったとはいえ、*reigaro* であった（これから中高独 *reiger*, 中低独 *rēger*, 中期オランダ *reigher* などへ）。しかし中期ドイツ語の時代には語中音の */g/* は口蓋化して、半母音 */j/* になった（この現象はひとりドイツ語のみならず、古期英語でもよく見られるもの）。かくて現独 *reiher* [ráiər] はその結果である。

すでにするした古英 *hrāgra* は中期英語の時代にフランス語からの借用語にとって代られたが、その異形として *higora*, *higera* 「ミヤマカケス」が記録に見える。これと対応するのは古高独 *hēhara* (> 中高独 *hēher* > 現独 *häher*) であって、これから措定される西ゲルマン語共通形の **χiguron-* は「アオサギ」の **χ(r)aigron-* とアプラウトの相違（すなわち印欧語根 **krikr-* : **kreikr-*）を介して密接な関係にあることが知れるのである。古英の両形は中世に廃語となった。なおこれらの形と類を同じくし、語根の構成法をよくつたえるものにリトアニア *kriksėti* 「キーキー音をたてる」、古スラヴ *krikī* 「叫び声」、ウェールズ *cregyr* 「アオサギ」などがある。反復音素が */g/* となり、さらに表現的な */s/* が語頭について由来したのが古英 *scric* 「ツグミ」(> 現英 *shrike*) である。しかし16世紀以来その意味は「モズ」(百舌鳥)である。同系語 *scream*,

screech のように語頭の子音結合群 (consonant cluster) が /skr-/ の音を保持せず、/fr-/ となった大きな原因はやはり同系語 shriek 「するどい声を発する」からの形態的、意味的な影響であろうと考えられる。ただしこの両タイプの子音結合のいずれが表現性に富んでいると人々に感じられるかは時代によって異なるであろう。

c) すでに掲げた「カラス」を意味する現代英語の三語は、どれも擬音語起源ながら、**crow** の構成だけは明らかに 他と異なっている。古期英語の形は *crāwe* で、古高独 *krā(w)a*, *chrāwa* (> 現独 *krähe*)、古サクソン *krāia* などと対応する。そして再構される西ゲルマン共通語形は **krā-* である。この場合、母音は本来の *ō* が期待されず、*ā* が措定されるのは、この鳥の鳴き声をあらわすのに、開口度の大きい後舌母音 (back vowel) である後者の方がより適していると感じられたからであろう。より高い表現性への意識が正常な音韻変化とはしばしば逆行する一つの事例である。とはいうものの、現英 *crow* [krou] は古英 [krá:wə] とくらべると、擬音的性質の点ではずっと低下しているのは明らかである。この場合、英語史上周知の大母音推移 (Great Vowel Shift) の一環 (古英 /a:/ > 中英 /o:/ > 現英 /ou/) が例外なく作用したからである。

さて、最終的に **krā-* から措定される印欧語根は **grā-* である。前項でも見たような重複音 /g/ が加えられて **grāg-* と拡張される場合もある。古北欧 *kráka*, *krákr* 「カラス」、古英 *cracian* 「鳴りひびく」(> 現英 *crack*)、古英 *craketan* 「(カラスのように) 鳴く」などはその構成法を反映している。「クイナ」を意味する現英 *crake* は中期の方言で「カラス」の意味であったが、上掲の古北欧 *kráka*, *krákr* を借用した可能性が高いと思われる。音韻変化のパターンがそのことを示しているからである。なお、現英 *creak* と *croak* もまたそれとは同起源の擬音語で、母音の音質の差がその意味に呼応してあらわれているのは音徴象の見地からして興味ぶかい (前者では前舌母音 /i:/ が小さく

て高い音を、後者では後舌・円唇母音がカラスやカエルなどのよくひびく鳴き声を暗示しているからである)。また /k/ をともなって *grak- と拡張された形をそのまま反映するのがラテン語 *grāculus* 「カラスの一種」であって、現英 *grackle* 「ムクドリ (の類)」はそれを借用したものである。

今までふれる機会のなかった日本語の「カラス」の語源について、ここで少し考えてみたい。まずこの語は *kara-su* と分析されうる。というのは他の幾つかの鳥名に見られるのと同じ接辞「ス」(-*su*) を有するからである。すなわち、ウグイス、ホトトギス、キギスおよびカケスにおける共通の要素である。この -*su* に対して朝鮮語で鳥を意味する *sai* をひきあわせる学者もいる。古代日本語におけるそれとの対応形が -*su* であったのか、それとも実在したのかどうかは記録されていないので、まったくわからない。もし実在したとしたら、独立形態素として記録にとどめられる以前に、すでに合成語の一部となると同時に意味自体も不明になっていたのであろう。通俗的な語源意識ではそれは「巢」と解されている可能性が大きい。さて、その前半の *kara-* については、この鳥の特徴的な色彩、「黒」(*kuro*) または「暗」(*kura*) の転訛が一般に考えられているけれども、そのいずれか一方より *kara-* への音韻変化は説明がつき難い。私の見るところでは、*kara-* の部分は色彩名ではなくて、むしろ鳴き声をあらわす擬音語ではないだろうか。またその可能性はさきほど見たゲルマン語の **kra-* とこの *kara-* との音韻的酷似によってのみならず、また言語の差異をこえて汎時的 (panchronic) に感得されうる音の象徴性によっても裏づけられると思う。

「ツル」(鶴)は「カラス」とはおよそ無縁の鳥であろう、というのが世の人々の通念かもしれないが、少なくとも言語の世界では両者はきわめて深い関係にあることがわかる。すなわち、ここでも語根 **gra-* が造語の基礎となっているのである。ただし、主として二次的な形成素 ^{フオルマンズ} -*en-* のついたものが諸言語にこの鳥の名称をもたらししている。古英 *cran* (> 現英 **crane**)、古サクソン *krano*、

中高独 *krane* などのように、*-en-* の代りに長母音 *-ū-* の加わったもの(**grū-*) から出たのがラテン *grūs*, ロシア *žuravl'* (<**z'ravl'*) である。他方, 古期英語には *cran* とは別に *cranoc* と音位転換の (metathetic) 形 *cornuc* とがあり, これらに対応するのが古高独 *chranih*, *chranuh* (>現独 *kranich*) であった。語構成のモデルは **granug-* で, 前記のものがさらに *-u-* と *-g-* によって拡張された形。今まで掲げた形はすべてアプラウトのゼロ階梯によって (すなわち **gr-* として) あらわれ, 二種の子音の結合が鳥のするどい鳴き声をよく模写しているが, 本来の正常階梯の語根 **ger-* を基底とした語も勿論存在する。ギリシア *géranos* 「ツル」, リトアニア *gerše* 「ツルまたはアオサギ」, ウェールズ およびコーンウォール *garan* (同) などのように。

この項の最後に日本語の「ツル」(*uru*) について私自身の見解を述べてみたい。万葉時代には「ツル」という語は用いられず, 「タヅ」の方が一般的だったことが知られている。さて, この場合にもまた朝鮮語の *turumi* との関係が早くから注意された。さらにトルコ語からは *turna* を加えることができよう。またツングース語の *turuya* も指摘されうるであろう。これから共通アルタイ語的な語根 **tur-* が措定されるとすれば, これはむしろ擬音語の性格が非常に強いと言わねばならぬだろう。ここでまた上に見た印欧語の **ger-*, **gr-* が大いに参考になる。しかし現代の意識にはそのようなことはほとんど反映していないであろう。ところで「ツル」と古語「タヅ」とはどのような関係にあるかはまだ判明していない。

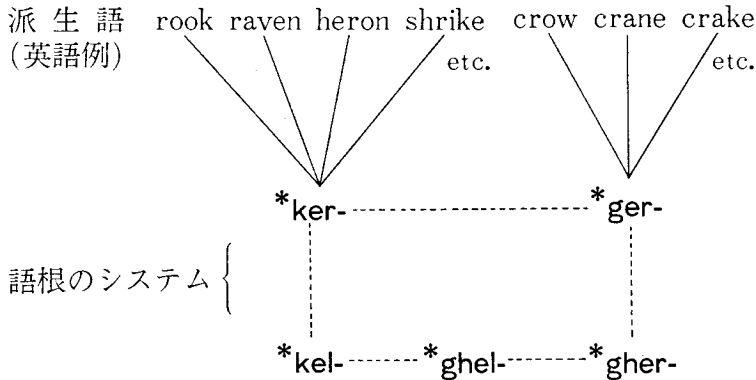
d) 今まで見たのは究極的に再構されるルート **ker-* と **ger-* との二種類だけであるが, この二つが実は印欧語圏で各種の鳥名のもっとも大きな供給源となっているのである。理由は簡単である。それらの音素の組合わせが現実の鳥の鳴き声をあらわすのに最適だと原印欧民族の間で感じられたからにはほかならない。そして多くの鳥の種類をあらわすために, 印欧語の各語派または個々の言語で様々な形態的改変が行われたこと, しかし他方ではそれらは音韻変化に対

しては例外たりえず、結果的にはその擬音的起源の面影をほとんど残さなくなったものが数少なくないこと——こうしたことが以上について再言されよう。

さて、上掲の二種のルートは印欧諸言語間の音韻対応の法則に従って再構されたものであるから、印欧比較言語学では学理的に別個の扱いをうけている。しかし、そもそも再構形なるものは同系諸言語の記録上の最も古い段階を示す諸形から抽出せられ、さらにより古い段階を推測するための便宜的な共通項にすぎないがために、決して絶対的な価値を有するものではありえない。しかも今ここにおいては形態音韻論的な点（すなわち語頭音の有声と無声との区別）および意味の点の双方を考慮するならば、両語根形は決してたがいに無縁のものとは考えられないばかりか、いわば二重語 (doublet) 的な対^{ペア}をなしていると考ええるほどである。種々の語源辞典で現在別々の語彙項目として取扱われているものの、こうした見地から一連のつながりを設定してもよいようなものが少なくない。もしこのようにして一群の語根形が一つの体系を形成すると見られるような場合、「語根家族」(root family) という名称を冠することができるのではないかと私は考えている。再構形相互の間にこのような関連性を見出すことが今後の歴史的比較研究における一つの課題ではないかと思う。

さて、このように見ると、上掲の二つの語根 *ker- と *ger- とに形態的、意味的關係の比較的高いと判断されるものとして、次の三つを加えることができよう。すべて「叫ぶ」という意味が帰せられているものである。(イ) *kel- (>古英 hlōwan「吠える」>現英 low「牛などが鳴く」、ラテン clāmāre「叫ぶ」、ギリシア kaléo「呼ぶ」など)、(ロ) *ghel- (>古英 gellan>現英 yell「叫ぶ」、ギリシア khelidón「ツバメ」、kíkhle「ツグミ」(<重複形の *ghighl-)など)、(ハ) *gher- (>古英 gierran「ひびく」、ラテン hirrire「哀泣する」、また拡張された二次的なルート *ghrēd- からゲルマン *grētan>古北歐 gráta「うめく」、別アプラウトのゲルマン *grōtjan>古英 grētan「話しかける」>現英 greet「あいさつする」など)。今まで述べたことをすべてまとめて図示すると次のごと

くなるのであろう。



e) 次にその他の主な鳥の名称について考察してみたい。

cormorant 「ウ」(鵜) は古期フランス語の *cormaran* (現仏 > *cormoran*) からの借用であって、この後者は中世ラテン *corvus marinus* 「海のカラス」の転訛したもの。ポルトガル語の *corvo marinho* はその句をほぼ原形どおりにつたえている。*corvus* については上述のとおりである。*raven*, *rook* と同源の語である。なお現英の語詞の末尾の *-t* は一種の「剰音」(*excrecent*) で、たとえば *pheasant* 「キジ」(雉子) (< 古仏 *faisan*) などと同じく、語源的には何のいわれもない。

cuckoo 「カッコウ」(郭公) については本論考の冒頭に記したこと以外に、次のことを述べなくてはならない。まず13世紀頃の語形は *cuccu*, 発音は [kú-kku] であったのが、中世の終り頃より近世初期(16世紀はじめ)にかけて起きた大母音推移(既述)のために、/u/ は非円唇化して /ə/ に、さらにその後 /ʌ/ になった。その結果18世紀までの発音は [kʌku:] が普通であった。ところがそれ以降は [kúku:] の音が優勢となったのである。この理由ははっきりしている。後者の方がその鳥の実際の鳴き声に近いと意識されたからである。音象徴の作用が陰ながらも無視されえぬことを説いたデンマークの碩学、イエスベ

ルセンも注目した現象である。より高い表現性を求める話し手たちの意図が正常な音韻変化の過程とは逆行する一つの場合である。そしてこの同じ表現性への力がまた別のところで作用したことを次に述べる必要がある。古期英語には同じく「カッコウ」をあらわす語として *geāc* があった。文献以前では当然ながら語頭の *g* は有声軟口蓋閉鎖音として発音されていたにちがいない。というのはこの語は少なくとも擬音語として出発したからである。しかしながら、西サクソン方言では *g* は文献時代にすでに口蓋半母音 /j/ となっていた。中期英語の発音 *geke* [jé:kə] (書きことばでは *zeke*) はそのことを示している。このようにして象徴音の性格はほとんど消失してしまった。これが別語 *cuccu* の登場をうながした次第である。今なお方言的に用いられる *gowk* は、消失しかかった中英 *zeke* を特に音韻的に補強するために借用された古期北欧語のそれとは同系の語 *gaukr* から発していると見てよい(なお、これと古サクソン *gāk*, 古高独 *gouh* (> 現独 *gauch*) などから再構される共通ゲルマン語形は **gaukaz* で、いうまでもなく擬音的起源)。

curlew 「ダイシャクシギ」(大尺嶋)の中期英語形は *curlu* または *corlu* であって、古(=現)仏 *courlieu* を借用したものである。これ自体は、その綴り字からもわかるように、通俗語源解釈の結果である。*courre* (= *courir* 「走る」の古形)と *lieu* 「場所」の組み合わせ、すなわち「先走りの者、使者」と解せられたのであろう。それ以前の形は *courlis* で、プロヴァンス方言 *correli*, イタリア *chiurlo*, スペイン *chorlito* などと同様、その鳥の鳴き声を模したものの。特に現代英語ではかつての舌の強い震動をともなう (trilled) [r] 音が発音体系から姿を消しているの、擬音性はさほど感じとれない。

finch 「ヒワ(の類の小鳥)」の古英形 *finc* に対する古高独 *fincho* (> 現独 *fink*) から再構される西ゲルマン語形は **finkjon* である。他方、北ゲルマン語形は語頭に *sp-* をもってあらわれる——スウェーデン *spink* 「スズメ」、ノルウェー方言 *spikke* 「小鳥」などのように。この後者の諸形の方がもとの印欧語を

より忠実に継承しているように思われる。というのはギリシア語でこの鳥を意味する語詞は *spíggos*, *spínos* としてあらわれているからである（古典語に対するゲルマン語の音韻法則の例外の一つとして、*-sp-* の子音結合では */p/* は */f/* に変化せず）。さらにギリシア語の動詞 *spízō* 「ピーピーと鳴く」はこの鳥名の由来を明らかに物語る。疑いもなく擬音の起源である。なお、ゲルマン語とギリシア語の語詞を結ぶ再構形は一応 **(s)pingo-* が推定される。

goose 「ガチョウ」（鵞鳥）——この古英 *gōs* に対する古フリジア *gōs*（ただしこの両言語では *n* 音が脱落した代りに母音が長くなった、いわゆる代償延長（compensatory lengthening）が特徴）、古高独 *gans*（現独も同形）、古北欧 *gás* などから得られる共通ゲルマン語形は **gans-*。他方、サンスクリット *hamsá-h*（男性名詞）、*hamsī*（女性名詞）、ギリシア *khén*, ラテン *ānser*（<**hanser*）、リトアニア *žąsis*, 古スラヴ **gasī*（>現ロシア *gus'*。ただしスラヴ語では有声摩擦音 */z/* の代りに、ゲルマン語の影響をうけて */g/* となる）などから推定されるのが **ghans-* で、ゲルマン語のそれを包括する、より一般的な印欧語のルートである。これが擬音語であるのは明白である。なお、「ガチョウの雄[♂]」を意味する古英 *ganra* または *gandra*（>現英 *gander*）、中低独 *ganre* から推定される **ganzá-* は上掲の **gans-* の異形と考えられる。ここで *[-z-]* > *[-r-]* への変化はゲルマン語の古い段階でよく起きた「*r* 音化」（rhotacism）の現象（たとえば古英 *betera*（>現英 *better*）に対して、より古い段階を具現するゴート *batiza* などの関係を参照のこと）。古英の后者の形 *gandra* は二箇の連続した歯茎音 *[-nr-]* の間にやはり同器官的な *[d]* が剰音として挿入されたもの。なお *gannet* 「カツオドリ」の古英形 *ganot*, およびこれに対する古高独 *ganazzo* 「ガチョウの雄」などは **gans-* のもう一つの異形 **ganoton* にもとづいている。

kite 「トビ」（鵟）——この語の古英形 *cýta* にはほぼそのまま対応するのは、鳥の名称に関するかぎり、ひとり中高独 *kūze*（>現独 *kauz*）「フクロウ」の

みである。しかし同じ語構成の他の語、中低独 *kūten* 「しゃべる」、あるいは別語幹による古英 *ciegan* 「呼ぶ」、古高独 *kūma* 「哀泣」、中高独 *kūme* 「悲しんで」（この意味から「虚弱な」→「不完全な」を経て、現独 *kaum* 「ほとんど……ない」と変った）などによって、今問題の語の原義は明らかになるであろう。すなわち、その鳥の（哀泣に似た）鳴き声が名称の由来なのである。ここでゲルマン語のルートは **kaujan* 「叫ぶ」、さらにこれから印欧語のそれは **gou-* または **gu-* 「叫ぶ」が措定される。ギリシア *goáo* 「悲しみ叫ぶ」、リトアニア *gaūsti* 「重苦しくひびく」、古スラヴ *govoriti* 「叫ぶ」（現代ロシア語では「話す」という意味に変化）などはすべて源を同じくする語である。

lark 「ヒバリ」（雲雀）の古い形は三音節語の *lāferce*、さらに古くは *læwerce* であって、対応形は古高独 *lērihha* (> 現独 *lerche*)、古北欧 *lævirki* (古英からの借用語といわれる)、古サクソン *lēwerka* などで、ゲルマン語共通の形は **laiw(a)rikōn*。ここで接辞の **-ik-* の部分は古高独 *belihha* (> 現独 *belche*) 「オオバン」（大鷲）、*chranih*, *chranuh* (> 現独 *kranich*) 「ツル」、あるいは *habuh* (> 現独 *habicht*。ただし *-t* は剰音) 「タカ」（鷹）などに見られるように、鳥の名称を構成するときの要素である。残余の部分 **laiw(a)r-*、より古くは **laiw(a)z-* はゲルマン語以外の諸言語の資料によってその意味を明らかにする必要がある。従来は「ヒバリ」をあらわす語はゲルマン語だけに限られているとされていた（たとえば *OED* のように）。しかし比較方法の進歩はその原義の解明を可能にした。すなわち、ここで音韻対応と意味変化の両面における最大限の可能性を考慮しつつ、きわめて有力で、妥当な傍証としてあげられるのはリトアニア *lóti* 「吠える」、古スラヴ *lajati* (同)、サンスクリト *ráyati* (同)、アルメニア *lam* 「泣く」、ラテン *lāmentum* 「嘆き」(< **lā-men-t-um*) など、あるいは重複を利用したギリシア *laléo* 「しゃべる、さえずる」、ラテン *lalia* 「しゃべること」などである。これらとあわせて結論されうるゲルマン語の「ヒバリ」の原義は、疑いもなく、その鳥の「さえずり」である。こうして

再構される印欧語のルート *lā- はれっきとした擬音語である。まさに lark はこれを根源としているのである。

loon 「アビ」(阿比)という語はかつて(17世紀頃まで) loom と綴られ、古北歐 lómr (>現北歐諸語 lom, 現アイスランド lómur 「叫び声」)の借用であるとはどの語源辞典にも記載がある。しかしそれ以上の説明となると承服しがたいものがある。たとえば、この鳥の陸上でのぶざまな歩き方は lami 「びっこの」(=古英 lama>現英 lame) 姿にたとえられるので、そう名づけられた、とするがごとき(Skeat の語源辞典)。古期北歐語には別種の鳥の名称として ló(複数形は lǫr)があった。これは「チドリ」(千鳥)を意味したが、lómr も実はそれと共に、今しがた上に見た擬音語ルート *lā- 「叫ぶ」から発しているとするのは少しも不自然ではない。

mew 「カモメ」(鷗)——この古英形 mǣw と直接同系の語は古サクソン mēu, 中低独 mēwe (→現独 möwe) などで、そのもとの共通形は *maiwiz。また他方、古北歐 mǫr (複数 mǫfar), 古高独 mēh から再構されるルートは *maixwaz で、この後者の方がより古風な(archaic)ことを示す(なお、カモメの一種をあらわす現英 fulmar はヘブリディーズ方言に残る古期北歐語から借用されたもので、その意味は fúll 「悪臭を発する」(=英 foul) とこの mǫr との合成語である)。これに対する印欧語のルートは *mek- であって、山羊の鳴き声をあらわすものとされる。サンスクリット mēká- 「雄山羊」、アルメニア mak'i 「羊」、ギリシア mēkásthai 「山羊が鳴く」、ラテン miccīre (同)、中高独 meckaten, 現独 meckern 「山羊が鳴く」、リトアニア mekenù (同)などはそれに帰せられる。この語根はまた拡張素 -k- をもたないで、鳴き声または他の動物をあらわすのにも用いられることがある。サンスクリット māyú- 「羊の鳴き声」、mayúra 「くじゃく」、ギリシア mimizō 「馬がいなくな」などのように。これらの傍証によって我々は mew がその特有の鳴き声を模した擬音語にもとづいていると結論できるであろう。この鳥の鳴き声が猫のそれによく似て

いるところから、その一種に対する呼び名が我が国で「ウミネコ」であること、また猫の鳴き声をあらわす擬音語が周知のように英 *mew*, *miaow*, 独 *miau*, 仏 *miaou* などであり、特にフランス語では「カモメ」のことを俗語で *miaulard* または *miauteur* 「ネコのように鳴くもの」ということなど、上の結論に対する積極的なデータである。

owl 「フクロウ」(梟)の古英形 *ūle* と対応するのは中低独 *ūle* (> 現オランダ *uil*)、古北欧 *ugla* (< **uggwala* ゲルマン語の *ww* はノルド語で *ggw* と変化)、古高独 *ūwila* (> 中高独 *iule* > 現独 *eule*) から設定されるゲルマン語共通形は **uwwalōn* であり、その鳥の鳴き声をあらわす。ところで、上掲のゲルマン諸語と次の諸言語との種々な形は根源的に同系 (*urverwandt*) であるとするよりはむしろ、*cuckoo* の場合のように、各言語独自の擬音語の構成であると考えの方が妥当かもしれない。すなわち平行的なものとして、ラテン *ulula* 「フクロウ」(これから動詞 *ululāre* 「叫ぶ」)、サンスクリット *ululī-ululū* 「吠え声」、リトアニア *uluti* 「吠える」、ギリシア *hulāō*, *hulaktéō* 「吠える」、中アイルランド *ulach* 「叫び」などがあげられる。

pigeon 「ハト」(鳩)は中期英語の時代に古仏 *pijon* (> 現仏 *pigeon*) を借入したもの。当時は一般に「ヒナのハト」を意味した。他方プロヴァンス方言の形はまたスペイン *pichón*, イタリア *piccione* などとして借用された。すべては俗ラテン *pipio-nem* から発していることが立証される。その動詞形は *pipire* 「ピーピー鳴く」であって、明らかにヒナの鳴き声をあらわしている。ところが、その後の音韻変化のために擬音語的性質は稀薄になった。それとともにこの語は「ハト」一般を意味する記号となったのである。印欧語のルート **pip-* をことさらに措定するまでもなく、諸言語はこの種のものにこと欠かない。たとえば、サンスクリット *píppakā* 「鳥の一種」、ギリシア *píppizō* 「ピーピー鳴く」、あるいは現英 *peep* などのように。さらに日本語からは鳥名の「ヒバリ」(*hibari*) と「ヒワ」(*hiwa*) をつけ加えることができるであろう。今では

この両者に擬音的性質を感じとる人はほとんどないと思われる。しかし日本語の音韻変化をたどってみると、その成り立ちは自ずと明らかになるであろう。すなわち、現代 /h/ < 奈良時代 /f/ < 上代以前 */p/ の変化にしたがうと、前者は *pibari, より古くは *pipari, 後者は *pifa, さらに古くは *pipa として、その正体は歴然となる。

さて、現代英語には野生および飼育されたハトをあらわす普通の語として上述の pigeon のほかに dove がある。これは主として雅語で、特殊なニュアンスをふくむ。ここで Oxford 語源辞典を参照してみよう。まず古期英語の形が示されていない。しかし実は dūfedappa 「ペリカン」という合成語の前半がそれである。といっても、古代では dūfe の部分が dūfian または(その変母音形) dýfan 「もぐる」(> 現英 dive) の意味に解せられていた可能性が高い(とすれば明らかに通俗語源解釈)。たとえそうでなかったにしても、この場合 dūfe は「ハト」という意味ではなかったであろう。中英 duve, douve がその意味をもって文献に出現するまでは、おそらく長期間方言的な潜伏があったものと思われる。他言語の対応形は古フリジア dūve, 古サクソン duba, 古北欧 dufa, 古高独 tuba (> 現独 taube), ゴート dubo などである。これらに対する共通ゲルマン語形は *dūbon である。さて上の辞典が附記する言葉は “presumed to be imitative of the bird’s note” となっているけれども、このルートは音感からして擬音的であるとするのは困難である。ゲルマン語内部だけでの考察はおのずと限度がある。印欧諸言語間の音韻対応を主眼に、あわせて語義の外延をも比較考量しつつ、我々はその辞典の見解を検討する必要があるであろう。このようにしてあげられる語はサンスクリット dhūpa- 「煙」、ギリシア túphos 「煙、もや、雲」、古アイルランド dub 「黒い」、古スラヴ dqbī 「樅→樹木(一般)」などである。一見無関係のように思われる、これらの語義のうちもっとも根源的なのは何であろうか。それは古期アイルランド語の語詞のもつ意味であろう。古代スラヴ語で「樅」はその黒ずんだ心材にちなんで名づけられたもので

あり、「煙」や「雲」についてはもはや説明を要しない。ここにおいて措定される印欧語のルートは *dheubh-「黒ずんだ」である。かくてゲルマン語の *dūbon はハトの黒っぽい色彩から由来していることが確かとなるのである。ラテン語でハトを意味する columba も、ギリシア語の kóymbos「アビ」(水鳥の一種) も実は黒ずんだ色をあらわすルート *kel- を基礎にしてつくられた語である。なお、色彩名から出た動物の名称については別の機会に論じることにした。

quail「ウズラ」(鶉)は中世に古仏 quaille (> 現仏 caille) から借用されたもの。さらにこの源として8世紀のラテン quacula と9世紀のそれ quacqua-ra との二つが指摘される。つまり前者は caille の直接の源、そして後者は courcaillet「うずらの鳴き声」という一種の混成語となっているのである。中低独および中オランダ quackele (> 現オランダ kwakkel) とイタリア quaglia はガロ・ロマン語からの借用である。なお古高独 wahtala, quahtala (> 現独 wachtel) もそれから借用された可能性があるが、擬音語として独自につくられたこともまた考えられる。たとえばサンスクリット kākāla-「カラス」が印欧語圏のはるか東方に見出されるように。この場合、あえてルート *kāk- の類を措定する必要はないであろう。

rail「クイナ」(水鶏)は中世にノルマン仏語の raille から借用された。古仏 raale (> 現仏 râle) のほかにアングロ・ノルマン形 radle が示すように、これは中オランダ ratelen, またヴァロン方言(ベルギー東南部) radeler「カタカタという音をたてる」から由来すると見るのがもっとも妥当であろう。というのはこの動詞自体がその鳥特有の叩くような鳴き声をあらわすのに好都合な擬音語だからである。なお、上記の ratelen は近世英語にも借入されて、rattle として通用している。プロヴァンス方言でこの鳥のことを rascla というのは動詞 rasclar (= 現仏 racler)「擦り取る、引っかく」に由来すると Bloch-Wartburg の語源辞典には簡単に記されているけれども、その最大の特徴たる鳴き声はそれでは否認されることになる。この鳥の命名はその鳴き声によらず

してはほかに考えようがないからである。

starling 「ムクドリ」(掠鳥)の古英形は *stærling* としてあらわれるが、他方この指小辞 (diminutive) のついていない形 *stær* に対応するのが中低独 *star*, 古高独 *star* (現独同形), 古北欧 *stari* で、これらからゲルマン語共通形は **staraz*。さらにラテン *sturnus* 「ムクドリ」(<**stornos* または **stŕnos*) が対応する。この *-n-* 語幹を有する形は古英 *stearn* 「ウミツバメ」に再現している。以上のすべてから印欧語のルート **storos*, **stornos* がえられる。この音声結合はおそらくムクドリの大変騒々しい鳴き声を指すものであろう。ただしこれは擬音語そのものというよりは、「回転, 攪乱」などを意味するルート **twer-*, **tur-* と深い関係があるのではないかと考えられる。この語根に帰せられるものとして、ゲルマン語では強意の *s-* を語頭にたてた **sturmaz* (>現英 *storm*, 現独 *sturm* など), **sturjan* (>現英 *stir*) などのほか、*-b-* で拡張されたギリシア *túrbē* 「騒ぎ, 混乱」, ラテン *turba* (同) などがある。このようなタイプを「準擬音語」という名称で仮に呼んでおこうと思う。

swan 「白鳥」——古英 *swan*, 中高独 *swan* (<古高独 **swan*), 古北欧 *svanr* などが帰せられるゲルマン語の鳥名 **swanaz* はその白色にあらずして、実は鳴き声から由来していることが次の諸言語の語詞から明らかになる。このことは *swan* に対する通念(たとえば “... in most species snow-white plumage” (COD.) を有するもの) からすれば、一見奇異な感じがしないでもない。また白鳥はその死にぎわに一声高く鳴くという伝説にちなんだものでないことも確かである。とすれば鳴き声を通常発する, ある種類の白鳥がその命名のもとになったとしか考えられない。上掲のゲルマン語のルートはサンスクリット *svánati* 「鳴りひびく」, ラテン *sonare* 「音がする」, *sonus* 「音」, そして再び古英 *swin* 「歌, しらべ」(>動詞 *swinsian* 「歌う」) などにあらわれている共通印欧語形 **swen-*, **swon-* の一つの反映なのである。なお, ギリシア *kúknos* 「白鳥」(>ラテン *cycnus*, *cygnus*) もまた別系統ながら擬音的起源の語であ

る。

thrush 「ツグミ」(鶇)の古英形 *þrysce* (<*þruskjon) とは別に *þrostle* (> 現英 *throstle* 「ウタツグミ」) があった。後者に対応するのは古サクソン *throsla*, 古高独 *drōscala* (> 現独 *drossel*) があり, すべてを通じてゲルマン語の祖形 **prau(d)sk-*, *-st-* がたてられる。その他の語派または言語では種々の対応形がみとめられる——ラテン *turdus* 「ツグミ」, 中アイルランド *truit, druit*, 現アイル *truid, druid* 「ムクドリ」 (<**trozdi-*), ギリシア *trugōn* 「コキジバト」, リトアニア *strāzdas* 「ツグミ」, ロシア *drozd* (同) などのように。印欧語の語根 **trozdos* は「ツグミ」を意味するものとして指定されるが, これだけでは鳥名の由来を説明することにはならない。さらに原義を究明するために, 印欧諸語で種々の鳥の名称の源となっている, 次のような /t/ と /r/ 両音の重複結合が大いに助けとなるであろう。サンスクト *tittirā-* 「ヤマウズラ」, アルメニア *tatrak* 「コキジバト」, ギリシア *tétrax* 「ホロホロチョウ」, リトアニア *tetervas* 「ライチョウ」, ロシア *tétere*v 「ヤマドリ」など。この諸形の基礎となっているのはルート **tet(e)r-* で, 実は擬音語構成である(日本語「ツル」などのルートとして指定された既述の **tur-* を参照のこと)。したがって「ツグミ」をあらわす語詞 **thrush** は究極的に擬音語起源なのである。

[参考文献はこのシリーズ最終回に記載]